

チ ョ ー サ ー の 不 定 詞 (III)

— 名 詞 (句) + 不 定 詞 —

松 瀬 憲 司

Chaucer's Infinitive (III) : Noun (Phrase) + Infinitive

Kenji MATSUSE

(Received September 1, 1999)

The "Noun (Phrase) + Infinitive [henceforth N(P) + Inf]" construction in the several verse and prose works by Geoffrey Chaucer (1340?-1400) is characterized as follows:

- (1) The morphology of the infinitive after the head N(P) is almost always "prepositional," that is, *to* infinitive or *for to* infinitive, except for the five very rare cases of bare infinitive found only in the present verse corpus.
- (2) There are three semantic relations between the head N(P) and the Inf which follows the head, where the head is Logical Subject or Logical Object/Complement of the infinitive, or Adverbial Adjunct to it. The present corpus indicates that the "N(P) + Inf" construction is very frequently used for the third type where the head functions as an adverbial adjunct to the infinitive (about 70 percent.)
- (3) The periphrastic passive infinitive used for this construction is rarely met with (only 2.1 percent;) hence the dominance of the active infinitive (including the retroactive infinitive.)
- (4) There are four functions which the "N(P) + Inf" construction has for the sentence: Subject of the sentence, Object of Finite Transitive Verb, Complement of Finite *be* Verb, and Object of Preposition. Statistics show that this construction is most intensively used as the object of the transitive verb of the sentence. And the transitive verbs which have relatively high co-occurrences with this construction are: *have, do, give, set, send, know*, and so on.

Key words : head, bare inf [initive], prepositional inf., periphrastic passive inf., retroactive inf.

1 はじめに

筆者はこれまで、「チ ョ ー サ ー の 不 定 詞 (I)」[1988年] および「チ ョ ー サ ー の 不 定 詞 (II)」[1990年]として、それぞれ、「主語機能」の不定詞と「be+不定詞」構文を取り上げてきた¹⁾。そこで、小論では、その(III)として、「名詞(句)+不定詞(以下"N(P)+Inf"と表記する)」という連鎖について議論するが、その論点には次のようなものがある。

- ①名詞(句)(以下N(P)と表記する)に後続する不定詞(Inf)の形態は、原形不定詞(ϕ -Inf)か、あるいは前置詞不定詞(Prep[ositional] Inf)か(さらにそのPrep Infの不定詞標識は、*to*か、あるいは*for to*か、すなわち*to*不定詞[*to*-Inf]か、*for to*不定詞[*for to*-Inf]か)。
- ②当該のN(P)とInf間の意味的關係はどのように把握されるのか。
- ③当該のN(P)+Infが担う文中の機能は主語かまたは目的語・補語か。

小論の構成は、これら三点について以下各節で議論することとし、最後の5節でまとめを行う。今回資料とした、Benson(1987³⁾によるチ ョ ー サ ー の 作 品 は 以 下 の 通 り で 有 る (①作品名、②省略表記、③行数、④推定制作年代の順に情報を示す)²⁾。

I. 韻文資料:

The Short Poems. References are to poem and line. Total 1,382 lines. c1370-1399.

The Canterbury Tales (Fragments I-IX [Groups A-H]). [CT(I-IX)] 17,415 lines.
c1375-a1400.

Anelida and Arcite. [Anel.] 357 lines. c1375.

The Legend of Good Women (Text F). [LGW(F)] 2,723 lines. c1386.

The Legend of Good Women (Text G). [LGW(G)] 545 lines. c1395.

The Romaunt of the Rose (Fragments A, B, & C). [RRose(A), RRose(B), & RRose(C)]
7, 692 lines. ?a1400.

II. 散文資料:

The Tale of Melibee from *The Canterbury Tales* Fragment VII (Group B2). [Mel.]
992 lines.

The Parson's Tale or *The Canterbury Tales* Fragment X (Group I). [Pars.] 1,018 lines.
Boece. [Bo.] 6,673 lines. c1380.

A Treatise of the Astrolabe. [Astr.] 1,731 lines. 1391.

2 名詞(句)に後続する不定詞の形態

現代英語(以下PDE)では、N(P)に後続するInfの形態については、唯一的に決定されている。すなわち、“N(P) + to-Inf”という連鎖である。Jespersen (1940:13.61)は、名詞や形容詞の「目的語」として機能する「to-Infの項目」にこの連鎖を挙げていることや、Declerck (1991:

(1)	ϕ -Inf	to-Inf	for to-Inf	TOTAL
VERSE: Short Poems	0 (0%)	16 (69.6%)	7 (30.4%)	23 (100%)
CT (I-IX)	2 (1.1%)	135 (77.1%)	38 (21.8%)	175 (100%)
Anel.	0 (0%)	5 (100%)	0 (0%)	5 (100%)
LGW (F & G)	0 (0%)	15 (60.0%)	10 (40.0%)	25 (100%)
RRose (A, B, & C)	3 (2.8%)	83 (76.9%)	22 (20.3%)	108 (100%)
TOTAL	5 (1.5%)	254 (75.6%)	77 (22.9%)	336 (100%)
Cf. Langland	0	246	0	246
Gawain-Poet	1*	98	0	99
PROSE: Mel.	0 (0%)	29 (76.3%)	9 (23.7%)	38 (100%)
Pars.	0 (0%)	55 (85.9%)	9 (14.1%)	64 (100%)
Bo.	0 (0%)	76 (97.4%)	2 (2.6%)	78 (100%)
Astr.	0 (0%)	12 (92.3%)	1 (7.7%)	13 (100%)
TOTAL	0 (0%)	172 (89.1%)	21 (10.9%)	193 (100%)
Cf. Wyclif	0	143	9	152

* ガウエイン詩人の ϕ -Inf の例は、“such... as” という相関句を伴っている。

487-492) の記述にも、この名詞修飾の Inf は、 ϕ -Inf の機能範囲として取り上げられていないことなどから、このことは理解される。

しかしながら、チョーサーの活躍した 14 世紀後半の中英語 (ME) 後期では、上述のような絶対的定式は発見されない。それは、古英語 (OE) 期にわずかながら見られた N(P) と ϕ -Inf との共起 (Mitchell 1985 : § 925) の痕跡を、これまたごくわずかに留めている点と、ME 期に発達した (そしてその後急速に消滅した) *for to*-Inf と N(P) との共起が見られる点で PDE の原則とは異なっている。

上表 (1) には、今回のコーパスにおける単独で現れる Inf の形態分布を示している (接続詞等で二つ以上の Inf が連結された場合はカウントしていない)。

あわせて比較のために、チョーサーと同時代のラングランド、ガウエイン詩人、ウィクリフの作品における “N(P) + Inf” の形態分布も掲載した³⁾。

また、具体的数値の提示はないが、Karttunen & Mustanoja (1958 : 189) は散文資料の *A Book of London English 1384-1425* では *to*-Inf の使用例しかないことを報告している。

さらに、Quirk (1995 : ch.9, p.99) のコーパス、すなわち、チョーサーの五つの作品における、初めの 500 行での分布は次の表 (2) のような結果になっている⁴⁾。

(2)	ϕ -Inf	<i>to</i> -Inf	<i>for to</i> -Inf	TOTAL
VERSE & PROSE	0 (0%)	37 (77.1%)	11 (22.9%)	48 (100%)

上二表から、ME 後期において、PDE での原則 “N(P) + *to*-Inf” が大筋確立していたことは認められる。ただ、先にも触れたように、① ϕ -Inf との共起および② *for to*-Inf との共起については多少議論を要すると思われる。

まず、 ϕ -Inf との共起であるが、Quirk (1995) が提示した標本調査の表 (2) では、 ϕ -Inf と共起する例は発見されていない。しかし、事実上、チョーサーには、 ϕ -Inf と共起する例が (他のチョーサーの作品での分布は未確認だが) 少なくとも 5 例は存在すると思われる⁵⁾。このように「最初から 500 行」といった限定された範囲での調査では、誤った言語事実の認定を引き出す可能性があるということを我々は銘記しておかなくてはならない。

さて、その ϕ -Inf と共起する例と考えられるのは以下のものである (主要語 [head] として機能する N(P) には下線を施し、当該の ϕ -Inf は斜体字で示している。また、RRose (B) と (C) のオーサーシップに関しては、チョーサーによるものであるとの確証はないが [Benson 1987³⁾ : 686], 今回の調査ではそれらも含めて提示している)。

- (3) a. For-why the feend foond hym in swich lyvyng
 That he hadde leve him to sorwe *bryng*e — CT (IV), 847-848
- b. And somtyme, at oure prayere, han we leve
 Only the body and nat the soule *greve* — CT (III), 1489-1490
- c. Whanne I hadde smelled the savour awote,
No will hadde I fro thens yit *goo*, — RRose (B), 1706-1707
- d. But in myn herte the heed was left,
 Which ay encreside my desir
 Unto the botoun *drawe* ner; — RRose (B), 1784-1786

- e. He wolde his might don at the leeste,
Nothing *spare* for Goddis heeste.

— *RRose* (C), 6431-6432

チャーサーの不定詞に関しては、かなり包括的な記述をしているあの Kenyon (1909) できえ、(3a)～(3d) の指摘はあるが、(3e) についての言及はない⁶⁾。また、その Kenyon に次ぐ労作と見なされている Kerkhof (1982²⁾) には、この連鎖自体への言及すらない。

Kenyon (1909 : 37, n.6 ; 39, n.2 ; 40, n.4) は、主要語の NP に対応する動詞に下位範疇化された属性としての共起する Inf の形態が、この連鎖にも持ち込まれるという説明を展開している。具体的には、(3a) と (3b) の *leve* の場合は、「意味的に」同類の *suffren*、(3c) の *desir* は、*desiren*、そして (3d) の *will* は、*willen* がそれぞれ ϕ -Inf と共起することができるために、上記のような共起関係を示すとするのである。しかし、このことは、Matsuse (1987 : 86) でも指摘したように、的を得た議論とは思われない。なぜなら、*suffren* は ϕ -Inf と前置詞不定詞 (Prep Inf) の両方と共起可能なことが確認されているし、事実上、*RRose* (C) の 5836 行では、*leve* が *to*-Inf と共起している。また、*desir* にしても、Kenyon (1909 : 92) が指摘する *desiren* と ϕ -Inf の共起は、*Troilus and Criseyde* の第 5 巻 1458 行と *CT* (VII) の 3279 行にわずか 2 例あるのみで、他の場合は *to*-Inf との共起が規則のようである。さらには、(3d) のすぐ後の 1788 行で、同じ *desir* が *to*-Inf と共起している事実も指摘できる。*willen* に関しては、法助動詞としての機能を確立していたこともあり、チャーサーでは、 ϕ -Inf との共起が規則であるが、同じく *RRose* (B) の 2103-2104 行で *wille* が *to*-Inf と共起しているのをはじめとして、数例が発見されている。つまり、Kenyon の説明は当該の N(P) と ϕ -Inf の共起の「可能性」を示唆しているにすぎず、 ϕ -Inf の根本的な存在理由の説明にはなっていない。主要語が意味的に対応する動詞が ϕ -Inf と共起できるけれども、この“N(P) + Inf”という連鎖では、Prep Inf しか現れないという例、例えば、*to dare* と *hardement* (= *daring*) のペアも発見できるからである。

結局、この ϕ -Inf の出現は、散文ではこの例が見あたらない事実も手伝って、「韻律上の要請 (metrical exigency)」(Kerkhof) という理由に落ち着かざるを得ないのだろうが (この中には、Kumamoto [1999] が主張するような「脚韻」の工夫なども含まれよう)、それにしても、今回得られたわずか 1.5% という数値はあまりにも少ない感がしてならない。

これと対照的なのが、*for to*-Inf の使用であり、今回のコーパスでは、韻文で 22.0%、散文で 10.9% を占めている。韻文で散文の二倍以上の共起率を示しているということは、とりもなおさず、「韻律上の要請」からであると断ずることはたやすい。しかし、問題は、むしろ散文での *for to*-Inf の使用なのであって (下例 (4) 参照)、韻文での使用ではないのである⁷⁾。

- (4) a. “What man,” quod he, “sholde of his wepyng stente that hath so greet a cause for to wepe?
— *Mel.*, 2979
- b. For in flour is hope of fruit in tyme comynge, and in foryifnesse of synnes hope of grace wel for to do
— *Pars.*, 288
- c. Another lesynge comth of delit for to lye,
— *Pars.*, 610
- d. ryght for the recompensacioun for to geten hem bounte and prowesse whiche that thei han lost,

— *Bo.*, IV, Prosa, 4, 279-281

- [= compensatione adipiscendae probitatis] — Stewart *et al.* (1973 : 350)]
 e. tables as well for the governaunce of a clokke, as *for to fynde* the attitude meridian;
 — *Astr.*, Introduction, 82-83

このことに関して、チョーサーの散文は多分に韻文的な「文体」を持っているためといった曖昧な議論も耳にするが、あまり説得力はないと思われる。むしろ、(4e)では、とくに、相関句の *as well... as* が使われていることから、前出のフレーズとの「平行性」を強調するために *for to-Inf* が使用された可能性は否定できないだろう。

Mustanoja (1960 : 514) が指摘するように、*for to-Inf* は「目的 (～するために)」という限定的機能領域を表す *Inf* として、ME 初期に出現したのだが、後に機能拡大を起し、やがては *to-Inf* と合流し、消滅してしまう。PDE で、「目的」を明確に表すには、あらためて、差別化された *in order to-Inf* を使用するといったデバイスが必要になることを考えると、この機能拡大がもたらしたデメリットはかなり大きかったのではないかと考えられる。しかし、最終的には *to-Inf* と全面的に (機能的に) 同一視されるようになるは言え、この *for to-Inf* は、それが存在している間は、*to-Inf* にはない *for* を持つことで、「差別的に」振る舞うことは可能だったはずである。言語経済の原則では、全く同じ機能のものが二つある必要はないのだから、両方が存在する以上、何らかの相違点がなければならない。その主なものが韻文での「音節補充」であり、あるいは、(4d) のような散文での「語用論的な強調」であったのではなかろうか (松瀬 1986 : 222)。ただ、「音節補充」の機能はさておき、「強調」の方は、「虚辞の *do*」に見られる歴史的な意味の重点移動のようなものが無かった分、定着度が低かったと想像される (松瀬 1995 : 11)。したがって、当然、その有用性も低いものとならざるを得ず、結果として消滅の憂き目にあったのであろう。

結論的に言って、この “N(P) + *Inf*” という連鎖では、その不定詞標識は、N(P) と *Inf* をつなぐ重要な「知覚的」役目を担っており、韻文において、いかに韻律上の要請があるとは言え、そうたやすく省略できるものではないことが理解される。逆に、*for to-Inf* の有用性はその構成素の「余剰性」にあることも同時に理解できるのである。

3 名詞 (句) と不定詞間の意味関係

次に、“N(P) + *Inf*” という連鎖において、当該の N(P) と *Inf* の間にある意味的な関係 (項構造) に着目した時、通常下例 (5) のような三タイプに分類される。それぞれ、主要語の N(P) が *Inf* の意味上の「主語 [行為者]」として機能するタイプ ((5a))、意味上の「補語・目的語」として機能するタイプ ((5b))⁸⁾、そしてそのどちらでもなく、*Inf* に対する、いわゆる「副詞的付加詞」として機能するタイプ ((5c)) である (Kruisinga [1931⁵ : II, 162] および Zandvoort [1975⁷ : 9-10] 参照)。今回のコーパスでは、上記三タイプは下表 (6) のような分布を示す。

- (5) a. Now certes, a man *to pride* hym in the goodes of grace is eek an outrageous folie;
 — *Pars.*, 470
 b. Bialacoil nyste what *to sey*;
 — *RRose* (B), 3853
 c. Now have ye cause *to clothe* you in sable,
 — “The Complaint of Mars,” 284

(6)	As Subject	As Complement/Object	As Adjunct	TOTAL
VERSE	50 (14.8%)	48 (14.3%)	238 (70.8%)	336 (100%)
PROSE	46 (23.8%)	13 (6.7%)	134 (69.5%)	193 (100%)
TOTAL	97 (18.3%)	61 (11.5%)	371 (70.2%)	529 (100%)

また, Quirk (1995: 106) の Table 9.9 から下表 (7) のような結果が得られる。

(7)	As Subject	As Complement/Object	As Adjunct	TOTAL
VRS & PRS	4 (8.3%)	8 (16.7%)	36 (75.0%)	48 (100%)

上二表より, 少なくとも, その7割を越える使用率が示しているように, 「副詞的付加詞」としての用法がこの“N(P) + Inf”構文の主たる機能範疇であると言って差し支えなさそうである。ただ, Quirk の標本調査に比して, 今回の調査では, 主要語が Inf の「主語」である用法の比率がかなり高いという結果がでている。この点に関しては, コーパスを広げてみないと正確なことは言えないだろうが, 特に散文コーパスでの2割を越す頻度は, “N(P) + Inf” 構文が散文で使用されるときの一特徴をなすと考えていいのかもしれない。

ところで, (5a) のような “N(P) + Inf” 構文は, a man *that* *prides* him といった関係詞節や a man *priding* him といった分詞形容詞を使用した後置修飾を伴う構造と競合関係にある⁹⁾。特に, 関係節による後置修飾の場合, 関係詞の出没と Inf 節の不定詞標識の出没といった, ある種パラレルな関係が興味を引く。PDE では, 主格の関係詞は「省略」不可だが, 目的格のそれは「省略」可能な点 (すなわち, Jespersen [1927] という「接触節 (contact clause)」である。ただ, Jespersen に言わせれば, 接触節は発生的に見て元々ゼロコネクターで出発しており, 関係詞を「省略」したものではない) がそれである。Inf 節の場合, 前節で見たように, 主要語が Inf 節とどのような文法機能関係で結ばれているとしても (初期英語においてできえ), ϕ -Inf が主要語自体と「接触」することは極めて稀であり, チョーサーの散文では皆無であった。つまり, “N(P) + Inf” という連鎖では, その不定詞標識の to や for to が主要語の N(P) と Inf 節を連結する「知覚的に」不可欠な要素になっているのに対して, 関係詞節の中には, そのような要素を省略したかのように見せることが可能なパターンを持つものもあるということである (山根 [1987: 57] によれば, チョーサーの韻文では, この接触節はふんだんに見られるそうだが, 散文では非常に稀であるという)。これは, 原理的には, 接触節を構成する目的格および副詞的關係詞節には必ず「主語」を表す N(P) があり, この N(P) 自体が主要語に対する知覚的コネクターの役割を担うために, そこに一種の「継ぎ目」が生じ, 関係詞という統語的に明示的なコネクターを不要に感じさせるからであろう。これに対して, 一般に主格の関係詞節では, 主要語とのコネクターである主格関係詞を落とすと, 主要語と関係詞節の動詞とが直接つながるようにプロセスされ, 知覚的混乱が生じることになる¹⁰⁾。もっとも, 「there 構文」などの一部の構文ではこのことが許容されることもあり (いわゆる, apo coinu), げんにチョーサーの散文での例は主格関係詞が省略されているものが多い (山根 [1987: 57])。この点, チョーサーの韻文に関しても同様の指摘が Roscow (1981: 115) でなされている¹¹⁾。いずれにしても, 関係詞節は, 文法機能的に見て可視的なコネクターの有無にかかわらず, 主要語と連結可能だが, Inf 節は, 必ずと言っていいほど連結のための何らかの標識を必要とするということである。

さて、ここで、「迂言的受動不定詞 (periphrastic passive infinitive: ppass. Inf)」について議論したい。Mustanoja (1960: 520) は、14 世紀にこの ppass. Inf が be 動詞+Inf 構文に登場し、その後 ME 後期にその構文の機能範囲として定着するものの、その発達は遅々たる歩みであったとしている。さらに、チョーサーでは一般に能動形の方が優勢であることも述べられている。なお、PDE でも “is to blame” 式の能動不定詞 (active infinitive: act. Inf) 形を時々目にするが、Fischer (1992: 337) は、この手の to blame や to let は “idiomatic phrases” として化石化しているものであり、ME 期以降 ppass. Inf 構文は着実に英語史に定着したとしている。

では、今回の “N(P) + Inf” 構文ではどのような分布を示すのだろうか。下表 (8) を見てみよう。

(8)	ppass. Inf	act. Inf	TOTAL
VERSE	4 (1.2%)	332 (98.8%)	336 (100%)
PROSE	7 (3.6%)	186 (96.4%)	193 (100%)
TOTAL	11 (2.1%)	518 (97.8%)	529 (100%)

Mustanoja の指摘通り、一見して、act. Inf の優勢は明らかであることが理解できる。

次に、この節での主題である主要語 N(P) と Inf 節間の意味関係に着目してみると、ppass. Inf は下例 (9) のような機能にのみ現れる。

- (9) a. “Now sith that maydens hadden swich despit
To been defouled with mannes foul delit, — *CT* (V), 1395–1396
- b. For thus seith Tullius, that ‘ther is a manere garnysoun that no man may venquysse ne disconfite, and that is a lord to be biloved of his citezeins and of his peple.’
 — *Mel.*, 2529–2530

(9a) は主要語の despit が、Inf 節の to been defouled 以下に対して副詞的な付加詞（一種の「同格」と言ってもいい）として機能している一方、(9b) では、主要語の a lord は当該 Inf 節 to be biloved 以下の意味上の主語として機能している。このことは、少なくとも主要語が Inf 節の意味上の目的語となるタイプでは、すべて act. Inf が使用されることを意味する。これが、Jespersen (1940: 15.21) でいう、「遡及不定詞 (retroactive infinitive)」である（上例 (5b) 参照）。つまり、主要語と Inf 節間の意味関係に着目した本節の議論と ppass. Inf の発達を絡めて言えば、チョーサーの “N(P) + Inf” 構文では、ppass. Inf が未発達なために、主要語が意味上の主語となって ppass. Inf と共起する関係を作りにくくしており、依然として act. Inf を使用した「遡及的」つながりで主要語と意味上の目的語として結びつく関係が優勢であると言える¹²⁾。

もう一つおもしろいことは、今回の資料では、この ppass. Inf が、(9a) のような主要語が副詞的付加詞として機能する例は韻文にしか見られず（4 例中 3 例）、散文資料では (9b) のように全て主要語が主語として機能していたことである。ppass. Inf の本来的な機能からすれば、主語・動詞の関係をより明確に打ち出せるのだから、そういう関係が生じるところで頻用されるのは当然のことなのかもしれない。このことは、しかし、そこに一旦韻律的な要素が入ってくることがあれば、それは「明確で論理的な」統語関係をも凌駕しうることを示しているのではなかろうか。

4 「名詞(句) + 不定詞」連鎖の文中での機能

第三の着目点は、当該の連鎖自体が、それが使用される文中でどのような機能(すなわち、「主語」(下例(10a))なのか、「動詞の目的語」((10b))・「前置詞の目的語」((10c))なのか、「be動詞の補語」((10d))なのか)を果たしているかである(以下の例では、当該の Inf を支配する定動詞や前置詞を太字 [ゴチック体] で表している。また、Inf を斜体字で表し、主要語に下線を施すことはこれまで通りである)。

- (10) a. The utilite *to knowe* the ascensions of signes/ in the right cercle **is** this:
— *Astr.*, II, 26, 24-25
- b. And [thou] lettest folk to **han** devocyoun
To serven me,.... — *LGW* (G), 251-252
- c. And [thou] lettest folk **from** hire devocioun
To serve me,.... — *LGW* (F), 325-326
- d. it scholde seme to som folk that this **were/** a merveile *to seien*
— *Bo.*, IV, Prosa, 2, 188-189
[= quod quidem cuipiam mirum forte videatur, — Stewart *et al.* (1973: 326)]

(10b) と (10c) は同一作品の異なるテキストに見られる現象なので非常に興味深い。(10b) では、当該の “N(P) + Inf” 構文が他動詞 han の目的語として表現されているが、(10c) では、それが前置詞 from の目的語となっている。*LGW* は詩であるので、韻律上、(10b) の Inf の目的語である、無冠詞主要語の devocyoun は、(10c) の前置詞を使用した表現では、hire devocioun という NP の主要語となることで音節数を調節しているようだ(逆に、han の目的語にするために、devocyoun を無冠詞にしたとも言える)。この場合、言うまでもなく、“letten (= prevent, hinder) + Object NP + Inf” と “letten + Object NP + from + NP” との同値関係が両者の生起を可能にしている。

また、(10d) については、当該の Inf 節はラテン語原典にはないことから (mirum = marvelous -ACC), to seien の部分はチョーサーによる加筆であることがわかる (a marvel to see とすることで一種の強調を生じさせることが可能)。

さらに、(10d) のような「be動詞の補語」としてこの構文が機能する場合、There is や Here is といった「存在文」とともに現れることもしばしば観察された。

- (11) a. Ther as **ther nys** no wyf the hous *to kepe*. — *CT* (IV), 1382
- b. **Heere** faste by,” quod he, “**is** myn entente
To ryden; for to reyen up a rente — *CT* (III), 1389-1390

さて、その分布としては下表(12)のような結果になった¹³⁾。

表(12)を見ると、動詞の目的語・補語としての機能がもっとも多く、8割近くを占めている(その中で、「他動詞の目的語」としての機能が全体の62.2%、「be動詞の補語」としての機能が16.4%であった)ことがわかる。つまり、この “N(P) + Inf” 構文は、他動詞の目的語 NP としてもっ

(12)	Subject	Object/Complement of Verbs	Object of Prepositions	TOTAL
VERSE	11 (3.3%)	286 (85.4%)	38 (11.3%)	335 (100%)
PROSE	10 (5.3%)	126 (66.7%)	53 (28.0%)	189 (100%)
TOTAL	21 (4.0%)	412 (78.6%)	91 (17.4%)	524 (100%)

とも頻用されていると言っていい。また、わずか4%ながら、主語 NP として機能する例が見られたが、韻文散文ともに同じような分布を示している点が興味深い。というのは、韻文ならば、韻律上の要請から主語部分を「重たく」することはままあることであろうが、散文で頭でっかちの主部を作ることは、どちらかと言えば文体上ためらわれるはずだからである。しかし今回の調査では、下例 (13) のように、散文でも、重たい主部が韻文同様にいくつか観察された (共起している動詞は be 動詞であることが多いのも特徴的である)。

- (13) a. Now certes, a man to pride hym in the goodes of grace **is** eek an outrageous folie;
 — *Pars.*, 470 [= (5a)]
- b. The utilite to knowe the ascensions of signes/ in the right cercle **is** this:
 — *Astr.*, II, 26, 24-25 [= (10a)]
- c. they wene that either the leve or the mowyng to don wikkidnesse, or elles the scapyng withouten peyne **be** weleful.
 — *Bo.*, IV, Prosa, 4, 189-192
 [= vel licentiam vel impunitatem scelerum putant **esse** felicem. — Stewart *et al.* (1973: 346)]

(13c) の場合、ラテン語原典では、scelerum (= of evil deeds) となっており、どうやらチョーサーが *to don wikkidnesse* (= to do wickedness) と Inf を使って書き直したようである。ただ、構文的には、ラテン語原典にある重たい主語をそのまま移していると言える (原典の方では、主節の putant (= they think) でさえもが埋め込み節の主語と述語の間に入り込んでいる)。とすれば、この重たい主部というのは、ラテン語翻訳の影響の一つとも考えられるかもしれない。

では、次に、当該の他動詞にはどのようなものが主に現れているのかをしてみることにする。

下表 (14) では、今回のコーパスにおいて “N(P) + Inf” 構文と 6 回以上ともに使用されている他動詞を示した¹⁴⁾。

(14)	VERSE	PROSE	TOTAL
have	93	49	142
do	29	8	37
give*	22	9	31
set	11	1	12
send	8	2	10
know**	7	3	10
take	7	1	8
find	7	1	8

* チョーサーでは、yeve(n) — yaf — yeve(n) という形で現れる (フリース [1998: 156])。

** know のコラムには、witen (= know) の数値も含まれている。また、nadde (= had not) や noot (= know[s] not) などの「否定縮約形」の数値も含まれている。

その具体例は以下の通り。

- (15) a. The lambish peple, voyd of alle vyce,
 Hadden no fantasye to debate, —“The Former Age,” 50-51
 b. That Nature **had a joye her to hehelde**; — *Anel.*, 80
 c. if so be that a man **do his diligence to parfourne** it, — *Pars.*, 782
 d. they **yeven** to other folk **ensauple to fleen** fro vices; — *Bo.*, IV, Prosa, 4, 87-88
 [= *ceteris quoque exemplum esse culpanda fugiendi*, — Stewart *et al* (1973: 342)]
 e. I woot wel that they sholde **setten hire entente to plesen** hir housbondes,
 — *Pars.*, 932
 f. Alas, **myne eyen sende** I ne may
 My careful herte **to convay!** — *RRose* (B), 2427-2428
 g. but trewely myn herte is troubled with this sorwe greuously that I **noot what to doone**.”
 — *Mel.*, 2191
 h. And [Youthe] of nought elles **taketh hede**
 But oonly folkes **for to lede**
 Into disport and wyldenesse, — *RRose* (B), 4937-4939
 i. And he that is ydel and slow kan nevere **fynde covenable tyme for to doon** his profit.
 — *Mel.*, 2728

(15d) は、ラテン語原典では、Inf の to fleen は、動名詞の fugiendi (= of escaping) に対応し、定動詞である yeven の部分は、esse (= to be) に対応している。また、(15h) に見られる taketh hede という連鎖は、PDE では、take heed として成句化していることがわかる。

have や do とこの “N(P) + Inf” という連鎖が共起するということは、ある種の「使役構文」と同じ表層構造を、また、find や see (註 14) 参照) との共起は、「知覚構文」と同じ表層構造を持つことを意味する(どちらの構文も SVOC という配列をなしている)。しかし、ここで扱う、“N(P) + Inf” 構文が他動詞の目的語になった場合と上記の二構文の間には、明らかに相違がある。

すなわち、主要語の N(P) が「生物」か「無生物」かを調べてみると、“N(P) + Inf” 構文では、圧倒的に無生物主要語が多い。これは、使役構文や知覚構文が、その目的語として生物 NP と共起しやすいことと対立的である。

また、特に、知覚構文で使用される Inf の形態は ϕ -Inf が支配的であるが、この “N(P) + Inf” 構文では、 ϕ -Inf はほとんど生起しないことを 2 節で確認済みである(ただし、ME 後期の doon を使用した使役構文に関しては、松瀬 [1993: 3] でも指摘したように、to-Inf や for to-Inf といった Prep Inf の使用もかなり観察されている。ただし、have に関しては、PDE では、 ϕ -Inf が規則である)。

使役構文や知覚構文で、目的語 NP に後続する Inf の形態の主流が ϕ -Inf であるということには、それらの構文で必須な NP + Inf 間に見られる「主語・動詞」性が関与していると思われる。つまり、当該の Inf に何の不定詞標識も付与しないことが、その前に置かれた NP と Inf 間の主語・動詞関係をスムーズにプロセスさせることになるのであろう¹⁵⁾。となれば、その動詞性の故に目的語 NP は「生物」の範疇を持つことが普通となることも大いに考えられる、換言すれば、これら二構文での重点は、Inf の持つ「動詞性」にあるのであって、他方、この “N(P) + Inf” 構文

では、まさにその主要語 N(P) の「名詞性」が強調されなければならない。したがって、その主要語に付着する Inf は、あくまで、いわゆる「付加詞 (adjunct)」なのであり、そのことを示すためにも、不定詞標識が是非とも必要なのである。

こう考えてくると、“N(P) + Inf” 構文での不定詞標識の必須性がうなずけるし (主格関係詞がなぜ「省略」しにくいのかも説明可能である)、なぜ ϕ -Inf が生起しにくいのかも理解できる。一般に NP に「動詞成分」を持った要素が後続するとき、我々はそこに「主語・動詞」の関係を想定しやすいため (これが自然な知覚プロセスなのである)、それを断ち切るには、何らかの感覚 (視覚・聴覚) 的に明示的な要素を必要とするのである。

5 ま と め

チョーサーにおける「名詞 (句) + 不定詞」構文に関して、今回の調査で得られた事実を以下に列記してみる。

- ① 主要語の名詞 (句) に後続する不定詞の形態は、わずか 5 例の原形不定詞の例を除いて、そのほとんどすべてが to もしくは for to の不定詞標識を持つ前置詞不定詞であった。
- ② 主要語の名詞 (句) と後続する不定詞節間の「意味関係」に着目した場合、当該の不定詞節が「副詞的付加詞」として機能する場合は約 7 割を占めた。
- ③ 迂言的受動不定詞はかなり少なく (2.1%)、能動不定詞が優勢であった。この中には、いわゆる遡及的不定詞もしばしば見られた。
- ④ この「名詞 (句) + 不定詞」構文自体の文中での機能として、もっとも頻用されるのは「他動詞の目的語」であった。その他動詞としては、have や do といった基本的な動詞が高い共起率を示した。

このようにして、文中の一構成要素として、「名詞 (句) + 不定詞」構文は、チョーサーの作品の中で使用されていることが観察できる。また、韻文では、ME 期ならでの、それが持つ不定詞標識 (to や for to) のバリエーションにより、韻律上の制約をうまくクリアしていると言える (のみならず、散文においても、文体的・語用論的デバイスとしての機能があることを指摘した)。

さらに、知覚のプロセスといったことを考えた場合、この「名詞 (句) + 不定詞」構文と関係詞節や使役・知覚構文等に見られる構造的パラレリズムの中で、その不定詞標識の出発は、「主語・動詞」という意味連鎖をいかにスムーズに知覚させ得るか否かに大きくかかわっている。すなわち、要素間のコネクターの機能を視覚聴覚的に実現する不定詞標識はまた、その前に位置する名詞 (句) とそれに後続する「動詞要素」としての不定詞の間の明示的「継ぎ目」の役割も果たしているのである。なるほど、「名詞 (句) + 不定詞」構文にも、当該の主要語名詞 (句) と不定詞との間に、意味的に主語・動詞の関係があるものも存在することは 3 節で指摘したとおりである。しかし、この場合も、使役構文や知覚構文とは違って、焦点は主要語名詞 (句) にあるのであり、不定詞の従属性ははっきりしている。おそらく、SVOC の構造を持つ使役・知覚構文の場合には、埋め込まれた OC の部分に当たる「名詞 (句) + 不定詞」を、意味的に SV という単位として「丸抱え」するのに対し (このことは、「文」の中心は「動詞」であることを物語っている)、「名詞 (句) + 不定詞」構文においては、あくまでも、SVO 構造の「O」の部分に補完する付加詞として不定詞が機能しているのであり、言ってみれば、SVO + Mo (Mo = Modifier for Object) とで

も言う、ある種の「継ぎ目」を持つ構造をしているに違いない。以上インフォーマルながら、このようなことが言えるかと思う。

この「名詞(句)+不定詞」構文は、統語的な単位から言えば、むしろマイナーな部類に属するものと言えようが、丹念にその分布を見ていくと、人間の知覚プロセスと文の統語構造が大いに関係していることがわかるなど、そこには様々な発見があることもまた事実と言わざるを得ない。

註

- 1) 「チョーサーの不定詞(I)－主語機能の不定詞－」、『熊本大学英語英文学』、第31号、pp.76-93 および「チョーサーの不定詞(II)－『be+不定詞』構文－」、『熊本大学教養部紀要』外国語・外国文学編、第25号、pp.1-15.
- 2) The Short Poems の中には、チョーサーの作品ではないと考えられるものが含まれている。それは、“Against Women Unconstant,” “Complaynt D’Amours,” “Merciles Beaute,” そして“A Balade of Complaint”である。また、*The Romaunt of the Rose* も Fragment B と C は、チョーサー以外の手になるものと考えられている。
- 3) ラングランドの資料は、*Piers the Plowman*, Text B [c1378] (Tajima 1968: 47) より、ガウエイン詩人の資料は、*Pearl, Purity, & Patience* [?1380] と *Sir Gawain and the Green Knight* [?c1390] (Tajima 1972: 45) より、そしてウィクリフの資料は、*Selected English Works of John Wyclif* [1376-1412] (Warner 1975: 208) より引用した。
- 4) この Quirk (1995) の9章“Non-finite Clauses in Chaucer”は、Jan Svartvik と共著の“Types and Uses of Non-finite Clause in Chaucer,” *English Studies*, 51, pp.393-411 (1970年)の改訂稿である。取り上げられた5作品とは、*The Canterbury Tales*, Fragment I [c1387 (Verse)], *The Tale of Melibee*, *The Parliament of Fowls* [c1380 (Verse)], *Boece*, *Troilus and Criseyde* [c1385 (Verse)] である。
- 5) 後から指摘されるように、このうち3例は *RRose* (B) および (C) からのものである。厳密には、チョーサーのものとは言い難い面がある。それでもなお、少なくとも2例は、明らかにチョーサーの作品に現れた ϕ -Inf とすることができる。
- 6) (3e) について、古フランス語の原典(11,226行と11,227行の間に挿入された96行に及ぶ箇所)では、次のようになっており、Inf は現れていない(ちなみに、Kumamoto [1999:49-51] で指摘されているように、原典の(i)では、動詞で脚韻が作られているのに対し、(3e)のME訳では、名詞で脚韻を構成しているのがわかる)。

(i) Son pooir au mains en feroit, (= a sa merci au moins il le reduirait,)

Que ja pour dieu nel laisseroit. (= car en aucun cas, par Dieu, il n’y renoncerait.)

— Jean de Meun, 55-56 [Strubel (1992: 662-665)]

これに対し、(3c) と (3d) に関しては、Kenyon (1909:39-40) にも指摘されているように、それぞれ talent de *repairier* と volentes... d’aler というふうに Inf が使用されている。このことから判断して、原典を直訳的に取り入れたとしたら、(3e)の後半部は、前半部全体を修飾する付加詞(それでもなお、 ϕ -Inf が使用されていることに変わりはない)と解されようが、と

くに, *poir* を *might* と受け取った点を考慮すると, 以下の読みも可能なのではなからうか.

(ii) At least he would do his might to spare nothing for God's commandment.

7) Burnley (1983:29) にも次のような指摘がある.

(iii) Although the *for to* infinitive is very common in the *General Prologue*, its sense is relatively rarely purposive, and its rarity in contemporary prose from the London area suggests that it may have served an essentially metrical purpose in Chaucer. It is, however, common in his own prose works, so that it may have become for him an habitual mode of expression. (emphasis mine)

- 8) 「主語」や「補語・目的語」という言い方は, Visser (1972:§ 926) が指摘するように, 術語上多少誤解を招くおそれがあるが, 「意味上の」という但し書きをつけてこの術語を使用することにする. よって, (5b) の *what* は「主語」ではなく, 「目的語」と捉えている (本文の「遡及的不定詞」に関する記述 [p.185] を参照).
- 9) Higuchi (1996:320) は, チョーサーの *CT, Troilus and Criseyde, LGW, Bo.* をコーパスとした調査において, 後置現在分詞が修飾語やその目的語を伴う節を構成する場合の方が, それらを欠くものよりも多かったことを報告している. いずれにしても, 現在分詞の場合, その形態的特徴である語尾の *-ing* が主要語名詞(句)とのコネクター表示の役目を担っていることは間違いない.
- 10) 同様のことは“N(P) + Inf”構文にも言える. やはり, (5a) を * a man ϕ *prides* him... is eek outrageous folie とすれば, 知覚プロセスのぎこちなさは隠しきれない.
- 11) *There* 構文で主格関係詞がしばしば脱落するのは, それが例えば上註 10) のような非文の例の「倒置形」であることに起因するのかもしれない. すなわち, 定動詞が関係詞節よりも「前」にあることが, 関係詞節の知覚プロセスを容易にしているのである. 韻文の場合, 特にこの特徴は利用価値がある. 音節を省略でき, なおかつ知覚プロセスのぎこちなさを減じることができるからである.
- 12) *He is to blame* 式の遡及的不定詞が迂言的受動不定詞に取って代わられた理由を Fischer (1992:338) は, 動詞に前置される NP の「解釈可能性」の変化に求めている. OE における SOV 語順では, 動詞に前置される NP は「目的語」の解釈を受けやすく, したがって遡及的能動不定詞との共起に何の問題も起きないが, ME での基本語順である SVO では, 当該の NP は「主語」の解釈を与えられるために (Denison [1993: 55] にも, “Changes in the relation between subject and finite verb are connected with the increasing association of pre-verbal position with subjecthood” とある), 以下の (iv) に見るような主節の主語と不定詞の意味上の主語とが同一指示でなければならなくなったのである.

- (iv) a. he_i is [PRO_i to come]
 b. he_i is [PRO_i to be blamed]
 c. *he_i is [to blame PRO_i]

- 13) 表 (11) には, (v) のような, 定動詞を持つ文章として現れていない例 5 例 (韻文 1 例・散文 4 例) の数値は除外している.

(v) *Another manere to knowe the mene mote.* — *Astr.*, Supplementary Propositions, 45

この部分は, 惑星運行の中間点 (mene mote) を計測するやり方をもう一つ紹介するパラグラフのタイトルの役目を果たしている (Benson [1987³] では, このタイトル部分は全て斜体字で校訂されている).

また, Object/Complement of Verbs のコラムで, be 動詞の補語となるものの例は, 韻文 57 例, 散文 29 例であった. 韻文資料で, この be 動詞の補語の位置に現れる“N(P) + Inf”構文はかなり頻用されているように見えるが, これは, (vi) のようなタイプが多く現れていることによる (17 例).

(vi) This is th'effect, ther is namoore to sayn; — *CT* (IX), 266

- 14) これに続く他動詞としては, make と ask が 5 例, catch が 4 例, get が 3 例, koude, see, leave が 2 例となっている. その他は全て 1 例ずつであった.
- 15) おもしろいことに, 使役動詞としての make に関しては, ME 後期の散文では, Prep Inf との共起率の方が高い (松瀬 1993:3-4). この事実は, make が ME 期になってから, 新たに「使役性」を獲得したことにかかわるのではなかろうか (これは, ME 期に借入された外来語の cause が, Prep Inf との共起が規則であることとも関係がありそうだ). そこには, 英語史における Prep Inf の発達時期と上述の主語・動詞性といった意味連鎖の知覚プロセスとの拮抗関係などが関与しているのではないか. すなわち, make の場合, 最終的に使役動詞の中心を担うようになるために, 主語・動詞の意味連鎖を優先させた形で PDE に継承され, ϕ -Inf との共起が規則として「返り咲いた」のに対し, 外来語の cause の場合, make, have, let といった本来語使役動詞とは異なった「使役性」のために (それが何であるかは今のところ不明だが), Prep Inf との共起を捨てることがなかったのかもしれない.

参考文献

- Benson, Larry D. ed. 1987. *The Riverside Chaucer*. 3rd edition. Boston: Houghton Mifflin.
- Blake, Norman. ed. 1992. *The Cambridge History of the English Language*. Vol. II. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Burnley, David. 1983. *The Language of Chaucer*. London: Macmillan.
- Dahlberg, Charles. trans. 1983. *The Romance of the Rose by Guillaume de Lorris and Jean de Meun*. Hanover: University Press of New England.
- Denison, David. 1993. *English Historical Syntax*. London: Longman.
- Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Fischer, Olga. 1992. "(Middle English) Syntax." In Blake ed., 207-398.
- Fries, Udo. 1985. *Einführung in die Sprache Chaucers: Phonologie, Metrik und Morphologie*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- (=フリース, ウド. 大泉昭夫訳. 『チャウサーの言語入門—音韻論・韻律論・形態論』東京: 開文社,

1998年.)

- Higuchi, Masayuki. 1996. *Studies in Chaucer's English*. Tokyo: Eichosha.
- Jespersen, Otto. 1927 & 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Vols. III & V. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Kaartinen, Anja & Tauno F. Mustanoja. 1958. "The Use of the Infinitive in *A Book of London English 1384-1425*." *Neuphilologische Mitteilungen*, 59, 179-192.
- 見目誠. 訳注. 1995. 『ギョーム・ド・ロリス, ジャン・ド・マン薔薇物語』東京: 未知谷.
- Kenyon, John Samuel. 1909. *The Syntax of the Infinitive in Chaucer*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd.
- Kerkhof, Jelle. 1982. *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer*. 2nd edition. Leiden: E.J. Brill.
- Kruisinga, Etsko. 1931. *A Handbook of Present-day English*. 5th edition. Part II. Groningen: P. Noordhoff.
- Kumamoto, Sadahiro. 1999. "On the Versification of the *Roman* and the *Romaunt*: An Attempt at a Comparative Study of Old French and Middle English Poetry." 『熊本大学英語英文学』, 42, 43-57.
- 松瀬憲司. 1986. 「『カンタベリー物語』の For to 不定詞について」
Cairn (現『九大英文学』), 29, 209-226. 九州大学.
- Matsuse, Kenji. 1987. *On the Use of the Infinitive in The Canterbury Tales*. MA thesis. Kyushu University.
- 松瀬憲司. 1988. 「チヨースーの不定詞 (I) - 主語機能の不定詞 -」
 『熊本大学英語英文学』, 31, 76-93.
- 松瀬憲司. 1990. 「チヨースーの不定詞 (II) - 『be+不定詞』構文 -」
 『熊本大学教養部紀要』外国語・外国文学編, 25, 1-15.
- 松瀬憲司. 1993. 「14世紀後半の散文の使役構文における不定詞標識について」
 『熊本大学教養部紀要』外国語・外国文学編, 28, 1-11.
- 松瀬憲司. 1995. 「15世紀散文における動詞 Do についての覚え書」
 『熊本大学教養部紀要』外国語・外国文学編, 30, 1-17.
- Mitchell, Bruce. 1985. *Old English Syntax*. Vol. I. Oxford: Clarendon Press.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Part I. Helsinki: Société Néophilologique.
- Quirk, Randolph. 1995. *Grammatical and Lexical Variance in English*. London: Longman.
- Roscow, Gregory. 1981. *Syntax and Style in Chaucer's Poetry*. Cambridge: D.S. Brewer.
- 境田進. 訳注. 1997. 『チヨースー薔薇物語』東京: 小川図書.
- 佐佐木茂美. 訳注. 1988. 『ギョーム・ド・ロリス薔薇の物語』東京: 大学書林.
- Stewart, H.F. et al. translators. 1973. *Boethius Tractates, De Consolatione Philosophiae*. London: William Heinemann.
- Strubel, Armand. trans. 1992. *Le Roman de la Rose par Guillaume de Lorris et Jean de Meun*. Paris: Le Livre de Poche.
- Tajima, Matsuji. 1968. "Verbals in *Piers the Plowman* (III): Infinitive." *The Essays in Literature and Thought*, 32, 1-55. Fukuoka Women's University.
- Tajima, Matsuji. 1972. "On the Use of the Infinitive in the Works of the *Gawain*-Poet." *The Essays in Literature and Thought*, 36, 1-56. Fukuoka Women's University.
- Visser, Frederikus Theodorus. 1966. *An Historical Syntax of the English Language*. Part II. Leiden: E.J. Brill.
- Warner, Anthony R. 1975. "Infinitive Marking in the Wiclifite Sermons." *English Studies*, 56, 207-214.
- 山根周. 1987. 『チヨースーの文法点描』大阪: 泉屋書店.
- Zandvoort, Reinard Willem & J.A. van Ek. 1975. *A Handbook of English Grammar*. 7th edition. London: Longmans, Green & Co., Ltd.